

目次

前口上

2

第一戦 ●

猿 VS 蟹かに

…「この恨み、晴らさでおくべきか」

6

(原話：民話『猿蟹合戦』)

第二戦 ●

猿 VS 烏からす

…「これぞ、猿真似!?」

40

(原話：『古今著聞集』卷第二十)

第三戦 ●

猿 VS

…「奏効した猿智恵」

46

(原話：『新説百物語』卷之三)

第四戦 ●

猿 VS 鷺わし

…「風変わりな恩返し」

51

(原話：『今昔物語集』卷第二十九第三十五話)

第五戦 ●

猿 VS 馬

…「油断大敵!」

66

(原話：『古今著聞集』卷第二十)

第六戦 ●

猿 VS 蛙かえる

…「お猿のお尻はなぜ赤い?」

70

(原話：民話『餅争い』)

第七戦 ●

猿 VS 犬

…「まさに、大猿の仲」

80

(原話：『今昔物語集』卷第二十六第七話)

第八戦 ●

猿 VS 亀

…「すまじきものは宮仕え」

94

(原話：草双紙『亀甲の由来』)

第九戦 ●

猿 VS 鷹たか

…「復讐するは我にあり」

109

(原話：『新説百物語』卷之三)

第十戦 ●

猿 VS 人間

…「便所の怪」

113

(原話：『近古史談』卷二)

出典一覧

118

前口上

120



第1戦

● 猿 VS 蟹かに

「この恨み、晴らさでおくべきか」

むかしむかし、あるところに、猿と蟹がおりました。
ある日のこと。

二匹は連れだって、川のほとりまで遊びにきました。
そのうち、猿は柿の種を、蟹はおむすびを見つけました。
蟹は、

「どつだね！こんなうまそうなおむすびを見つけたぞ」
と、いかにも得意げ。

猿も負けじと、

「おれだって、こいつを見つけたぜ」
と、柿の種を蟹に見せつけました。

とはいえ、あきらかに猿のほうが分ぶが悪い。
それはそうでしょう。

たしかに、柿の実は猿の大好物ですが、種たねだけでは、どうしようもありません。
一方、蟹の拾ったおむすびは、だれが見たって、うまそうな代物しろものです。

猿は、蟹からおむすびをせしめてやろうと一計を案じ、こう切りだしました。

「おいおい、蟹さんよ。おれの柿の種と、あんたの
おむすびと、交換する気はないか？」
蟹は笑いながら、答えました。

「馬鹿なことを言っちゃいけないよ。そんな貧相な柿の種と
こんなに大きなおむすびを取りかえるような奴が、
この世にいるもんかね。」



猿は首を振りながら、ことさらにまじめな顔をして、言いました。

「いやいや、そりゃあ、あんたの考えちがいうもんだ。
なぜだか、教えてやろう。」

いいかね、たしかにおまえさんのおむすびは、
大きくて、うまそうだ。

だけど、いくらうまいといたって、
食べてしまえば、それっきり。

あとからの楽しみ、つてもものがない。

それにひきかえ、柿の種ときたら、どうだい。

たしかに、見栄^{みば}えはしないし、ここでためしに

かじってみたところで、うまくもなんともないさ。

けどなあ、ここが考えどころだ。

なにせ、こいつを地面に植えて、大きな樹になるまで

たいせつに育てりゃあ、甘い甘い実がたんと生るって寸法だ。
そうになったら、毎日、柿の食べ放題！

なっ？ すてきだろ？

いまさら面とむかってことばにするのも気恥ずかしいが、あんたは、おれの友だちだ。

だから、あんたには、将来、うまい柿の実を腹いっぱい食ってもらいたい。そう思ったから、この種を譲ろうとしたんだ。

だけど、あんたが嫌だっていうなら、無理強いはいしないよ。

種はおれが持って帰って庭に植え、だいじに育てるまでのことさ。

ただし、言っておくが、この先、おれの柿の樹に

実が鈴生りすずなになったって、おまえさんには、

ただのひとつだって喰わせてやらないからな。」

こう言われますと、なにぶん、根がすなおな蟹のこと。

「そ、そうだったのか……。あんたがおれのことを

そんなに親身に思ってくれているとは、ちっとも知らなかったよ。

申しわけない。それに、考えてみたら、

あんたの言うとおり、

いまはちよつとばかりがまんしておいて、

後日、柿の実をどつきり頂くというほうが、得だわな」

と納得して、おむすびを猿へ差し出しました。

猿は、

「しめた！こいつの気が変わらぬうちに……」

とばかりに、渡されたおむすびを、その場でみるまに平らげてしまいました。

そして、いかにも惜しそうに、柿の種を蟹へ引き渡しました。

その後、二匹は、別れてめいめいの住処すまかへ帰っていきました。



蟹は住処へ帰るやいなや、猿が言っていたとおり、種を庭へ蒔まきました。

しばらくすると芽が出て、二葉ふたば、四葉よつばと育ち、ぐんぐん背丈が高くなっていき
ました。最初はかよいい草のようであったのに、いつしか樹木らしく、たくましく
生長していく姿に蟹は心動かされ、けんめいに世話をしました。

さて、俗に「桃栗三年、柿八年」と言いますが、その言葉に違わず、蒔まいてか
ら八年も経ちますと、柿はりっぱな大樹となり、秋にはうまそうに赤く熟した実
がたわわに実りました。蟹にとりましては、待ちに待った収穫の時。喜び勇んで
柿の木の下まで行き、一刻もはやくあのうまそうな柿を頬張ほおばりたいものだ、自
慢の鉢はちまを伸ばしますが、背が低いので、ちっとも届きません。

「ええい、なんとじれったい。よしっ、それならば・・・」と、今度は幹によ
じ登ろうとしましたが、なにせ蟹の身。生まれつき横歩きしかできないので、う



出典一覧

◎『古今著聞集』…

説話集。橘成季なりすえ編。建長六（一二五四）年成立。二十卷。
神祇、公事くじ、文学など、約七百話を収録。

◎『今昔物語集』…

説話集。撰者未詳。十二世紀初頭の成立か。三十一卷。
天竺・中国・日本の仏教説話や世俗説話など、一千余話を収める。

◎『新説百物語』…

物語集。小幡宗左衛門著。明和四（一七六七）年刊行。五卷。
怪談のみならず世俗の奇話など、五十数話を収める。

◎『亀甲の由来』…

草双紙。作者・画工未詳。宝暦四（一七五四）年刊行か。二卷二冊。
仏教経典に由来する「猿の生き肝」譚の一変種。

◎『近古史談』…

歴史書。大槻磐溪ばんけい著。元治元（一八六四）年刊行。四卷。
名君や忠臣などに関する百数十の逸話を収める。

しめ
メロ上

山に海に、村に野に、

神出鬼没のおさるの戦働き、

しかとご見聞いただけましたでしょうか。

この際、「見ざる、聞かざる、言わざる」は

脇へ措き、

本書に記されたおさるの事どもを、

お知り合いの方々へ言い伝え、語り継いでいただきますれば、

望外の喜びに存じます。

恐惶謹言、あなかしこ、あなかしこ、

しめ
メロ上、

もつ
以てこれぎり。



著者紹介

福井 栄一 (ふくい えいいち)

上方文化評論家。四條畷学園大学看護学部
客員教授。京都ノートルダム女子大学人間文
化学部 非常勤講師。関西大学社会学部 非常
勤講師。

大阪府吹田市出身。京都大学法学部卒。京都大学大学院法学研究科修
了。法学修士。

日本の歴史・文化・芸能に関する講演を国内外の各地で行うほか、通
算で26冊を超える研究書を出版している。剣道2段。

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~getsuei99/>

おさるの大合戦 炎の十番勝負 定価はカバーに表示してあります。

2015年12月1日 1版1刷発行 ISBN978-4-7655-4249-4 C0039

著 者 福 井 栄 一

発 行 者 長 滋 彦

発 行 所 技報堂出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-2-5

電 話 営 業 (03) (5217) 0885

編 集 (03) (5217) 0881

F A X (03) (5217) 0886

振替口座 00140-4-10

日本書籍出版協会会員
自然科学書協会会員
土木・建築書協会会員

Printed in Japan

<http://gihodobooks.jp/>

©Fukui, Eiji 2015 装幀：田中邦直 イラスト：川名 京 印刷・製本：三美印刷

落丁・乱丁はお取り替えます。

JCOPY <(社)出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、その
つど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979,
e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。